



同期の詩学：マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』における群集と集団性の表象

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本独文学会 公開日: 2024-12-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 海老根, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/0002001427">http://hdl.handle.net/10466/0002001427</a>

## 同期の詩学

マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』における群集と集団性の表象

海老根 剛

### 1. はじめに

本論文の主題は、マルティン・ケッセルが1932年に発表した小説『ブレッヒャー氏の失敗』(*Herrn Brechers Fiasko*)にみられる群集および集団性の表象の考察を通して、新即物主義の都市小説における群集の主題を考える新たな視点を探ることである。

1920年代前半から1930年代初頭にかけて隆盛した新即物主義の小説については、その際立った特徴のひとつとして、複雑な内面を具えた個人(Individuum)の運命を描くのではなく、類型(Typus)として把握された登場人物の行動を分析的に叙述するという点がしばしば指摘される。新即物主義の時世小説(Zeitroman)では、一人の人物の運命をその心理も含めて首尾一貫して追跡し、物語ることは目指されておらず、登場人物の「人生のごく短い一部分だけ」が叙述される<sup>1</sup>。しかも「そのさい登場人物たちは個人としてではなく、社会的類型として理解され、それら類型の生活状況や意識や運命は、ある社会集団にとって典型的なもの」として扱われる<sup>2</sup>。こうした登場人物の扱いは、ある特定の職業なり社会階層の全体を、その成員に共通する典型的特徴を具えた一人の人物によって代表させるという意味での類型化の手法とは異なっている。クラカウアーは、1930年に出版された『会社員』(*Die Angestellten*)において、同時代のベルリンに現れた会社員たちのうちに規範的類型(Normaltypus)を見だし、それを個人を規格化し画一化する社会の圧力の産物として論じた<sup>3</sup>。このクラカウアーの分析に従うなら、新即物主義の小説における登場人物の扱いは、単なる人物造形の一手法にとどまらず、眼前の社会的現実を分析するための方法であったとみなすことができる。

この観点に立つならば、新即物主義の小説は群集化した個人の生活を主題にしていると言えることができる。たとえば、新即物主義の小説における群集表象を群集心理学的観点から

---

<sup>1</sup> Sabina Becker: Neue Sachlichkeit im Roman. In: Dies. u. Christoph Weiß (Hrsg.): Neue Sachlichkeit im Roman. Neue Interpretationen zum Roman der Weimarer Republik. Stuttgart Weimar (J. B. Metzler) 1995, S. 12.

<sup>2</sup> Ebd.

<sup>3</sup> Siegfried Kracauer: Die Angestellten. Aus dem neuesten Deutschland. In: Ders.: Werke Band 1, Frankfurt a. M. (Suhrkamp), 2006, S. 265. 以下では、原則として、タイトルをDAと略記し頁数を本文中に記載する。なおdie Angestelltenはしばしば「サラリーマン」と訳されてきたが、実際には男性だけでなく女性も数多く含まれるため、本論では「会社員」という訳語で統一する。

考察したレギーネ・ツェラーは、新即物主義の代表的な「会社員小説」(Angestelltenroman)の登場人物たちの特徴を、「群集 (Masse) を形成していながら、みずからはそのように感じていない」者たちだという点に見だし、会社員小説の中心的な主題を、大都市生活がもたらす群集化の圧力に抗して個人であろうとする主人公の挫折のうちに認めている<sup>4</sup>。またケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』を作品論的に考察したベルンハルト・シュピースも、いつでも交換可能な機能的存在——つまり群集——に過ぎないみずからの現実を否認する「会社員イデオロギー」の批判に、同作の主題があるとみなしている<sup>5</sup>。

他方、より近年の研究では、いま言及した先行研究をも含む従来の研究のアプローチを批判的に再検討する試みもなされている。20世紀初頭から1933年までの会社員をめぐる言説を詳細に検討し、会社員を主題とする小説と映画の歴史的展開を通覧したザビーネ・ビーブルは、会社員小説を論じた従来の研究がクラカウアーに代表される同時代の文化批判的な会社員分析を無批判に受け入れ、それを作品解釈の解説格子として用いてきたことを批判している。そこではクラカウアーらの文化批判的言説自体が属する歴史的な文脈が無視され、そうした言説によって提示された問題設定と価値づけの地平のなかでのみ解釈が積み重ねられてきた。その結果、それら同時代の言説とは異なる視点から作品を読み直す試みが妨げられてしまったのである<sup>6</sup>。ビーブルはまた、同様の理由から、当時の文化批判的言説と文学作品が同時代の会社員という存在の理解をめぐる競合関係にあったこともまた見逃されたと指摘している<sup>7</sup>。同じく「会社員小説」を新たな角度から読み直す試みとして、イネス・ラウファーの研究を挙げることができる。ラウファーは、会社員小説の登場人物たちが住む住居に注目し、「新しい居住」(Neues Wohnen)をめぐる当時の言説や実践に照らして登場人物たちの行動を分析することで、新即物主義の都市小説における登場人物の造形に新たな角度から分析を加えている。ラウファーによれば、それらの小説に描かれる1920年代の居住空間は、ベンヤミンが分析してみせたような19世紀の市民階級の室内とは異なり、内面性や親密性と結びついた定住の空間ではなかった。それは機能化された仮住まいの空間であり、流動的な大都市の生活と結びついた新しい主体性の構築の舞台として機能したという<sup>8</sup>。この読解に従うなら、新即物主義の小説は会社員という存在の理解において、彼らを群集とみなした文化批判的言説と実際に競合関係にあったことになる。

<sup>4</sup> Regine Zeller: „Einer von Millionen Gleichen“. Masse und Individuum im Zeitroman der Weimarer Republik. Heidelberg (Universitätsverlag Winter) 2011, S. 159, S. 168.

<sup>5</sup> Bernhard Spies: Die Angestellten, die Großstadt und einige „Interna des Bewußtseins“. Martin Kessels Roman „Herrn Brechers Fiasko“. In: Becker. u. Weiß (Hrsg.): Neue Sachlichkeit im Roman, S. 241.

<sup>6</sup> Sabine Biebl: Betriebsgeräusch Normalität. Angestelltendiskurs und Gesellschaft um 1930. Berlin (Kadmos) 2013, S. 15-17.

<sup>7</sup> Ebd., S. 18

<sup>8</sup> Ines Lauffer: Poetik des Privatraums. Der architektonische Wohndiskurs in den Romanen der Neuen Sachlichkeit. Bielefeld (transcript) 2011, S. 20-22.

本論ではこうした比較的近年の研究の知見も参照しつつ、ケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』を考察する。最初にまず 1920 年代半ばに生じた主導的な群集表象の変容を確認し、次にクラカウアーの『会社員』を群集を論じた当時の言説の一部をなすものとして位置づける。そのうえで、ケッセルの小説の一場面に注目し、そこに見いだされる特異な集団性の表象を考察してみたい。

## 2. 1920 年代中期における群集表象の変容

新即物主義の都市文学に関して群集という主題を論じる場合、1920 年代中期のドイツ語圏で進行した群集をめぐる言説の変容——群集の主導的な表象の変化——を確認しておく必要がある。著者はすでに別の論文において、この変化を「革命的-忘我的群集」から「技術的-機能的群集」への移行として論じたことがある<sup>9</sup>。その要点を簡潔にまとめると、以下の通りである。ヴァイマル共和国時代の初期においては、ドイツ革命の日々に出現した群集の体験が群集をめぐる言説の根底にあり、文学作品やエッセイにおいても、デモや蜂起によって街頭や広場を埋め尽くし、ストライキによって工場の操業を中断する群集、つまりその行動によって社会秩序を揺さぶる存在としての群集が、主題化されることが多かった。そうした群集の体験は、自己と他者の差異を消し去り、諸個人を高次の集団へと統一する点で陶酔的な性格を具えていた。それに対して、1920 年代半ばになると、大都市文化とマスメディアの経験を背景として、まったく異なるタイプの群集のイメージが文学作品や社会分析において主題化されるようになる。それらの言説で提示されるのは、多数の他人たちからなる大都市生活を可能にする技術的な諸システム（公共交通、マスメディア、消費経済、文化産業など）と親和的な群集であり、技術的合理性によって特徴づけられる群集である。以下では、いくつか具体例を参照して、上記二つの群集表象の違いを示しておきたい。

1929 年に出版されたブローダー・クリスティアンゼンの小著『我らの時代の顔』(*Das Gesicht unserer Zeit*) は、新即物主義文学を論じる文献において、新即物主義についての同時代の考察としてしばしば参照される。この本でクリスティアンゼンは、主要な生活感情を表す 4 つの様式の変遷という観点から同時代の社会の動向を論じている。ここで言う 4 つの様式とは、(1) V (=Vergangenheit 過去) 様式、(2) G (=Gestern 昨日) 様式、(3) H (=Heute 今日) 様式、(4) M (=Morgen 明日) 様式を指しているが、クリスティアンゼンの議論の中心を占めるのは G 様式と H 様式の違いである。これは表現主義と新即物主義の違いに対応している。クリスティアンゼンは、それら二つの様式の違いを次のように要約する。

<sup>9</sup> Takeshi Ebine: Der Wandel von Kollektivbildern in der Weimarer Republik. Eine Imaginationsgeschichte der Masse und ihre Revision. In: Yoshiyuki Muroi (Hrsg.): Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. München (Iudicium) 2021, S. 321-327.

G と H、表現主義と新即物主義は、主題と対主題のように正反対である。G は単なる約束であったが、H は能力と実績 (Leistung) を過度に強調する。G は現実と疎遠であったが、H は誇張のない (nüchtern) 具体的な現実を要求する。G は非合理的だったが、H は過度に合理的 (überraional) である。G はありとあらゆる深い問題の重みを担わされていたが、H はみずからを単純明快な (unproblematisch) ものとして提示する。G は大いに悲壮的 (pathetisch) だったが、偽物になりがちであった。H は悲壮さを欠いているが、徹底した本物性を要求する。G は出発 (Aufbruch) の混沌だったが、H は几帳面なまでに明快な秩序を保っている。G はありとあらゆる個人的なもの (das Persönliche) の特性を求めたが、H は非個人的な (unpersönlich) 同形性を評価する。G は超人を求めたが、H は群集人間 (Masse Mensch) を欲する。<sup>10</sup>

この一節でクリスティアンゼンは、新即物主義を特徴づける諸価値 (能力と実績、合理性、現実性、単純さ、本物性、秩序性、非個人性) の系列の最後に、それが求める人間像として「群集人間」を位置づけている。ここでクリスティアンゼンは、共和国中期以降の言説に特徴的な「技術的-機能的群集」のコンセプトを素描していると言ってよい。

いま引用した個所でクリスティアンゼンが新即物主義のスローガンのひとつとして *Masse Mensch* という言葉を掲げていることは、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説の展開という観点からみると、非常に興味深い。というのも、この言葉は共和国初期に革命的群集を印象的な仕方で描き出した作品のタイトルを想起させずにはおかないからである。1919年にエルンスト・トラーが執筆した後期表現主義的戯曲『群集-人間』(*Masse-Mensch*) がそれである。この作品でトラーは、クリスティアンゼンが提示するのとはまったく異なる群集のイメージを描き出していた。

たとえば、トラーは『群集-人間』の第五景でヒロイックであると同時に不気味な群集の姿を描き出している。場面は大きなホールで、市民階級出身の女性活動家と「無名の者」(der Namenlose) と呼ばれる謎の人物が、群集の前であるべき革命の形をめぐる論争する。すでに第三景でも二人は論争しており、女性活動家がストライキを主張したのに対して、「無名の者」はそれでは不十分だと主張し、蜂起を求めたのだった。結局、群集は無名の者を支持し、叛乱を開始する。第五景では蜂起の失敗が明らかになり、労働者たちが軍隊によって殺戮されているという知らせが次々に届く。女性指導者は武力闘争をやめるように主張するが、「私が群集だ」と語る「無名の者」は「群集は生きねばならぬ」と主張し、あくまでも行動を貫徹するよう要求する。群集が無名の者の「生きねばならぬ」という言葉を復唱することで支持を表明したとき、ホールがいつの間にか敵に包囲されていることが明らかに

<sup>10</sup> Broder Christiansen: *Das Gesicht unserer Zeit. Baden (Felsen) 1929*, S. 37-38.

なる。恐怖に襲われた群集は出口へ殺到するが、逃げのびる望みのないことがわかり、死の予感に静まり返る。このとき「死ぬのだ！」(Sterben!)というひとつの叫びがホールに響き渡る。すると誰かが「インターナショナル」を歌い始める。この歌声は、パニックに陥りかけていた労働者を革命的群集へと再統合する匿名の声として機能する。瞬く間に他の者たちもこの歌声に加わり、ホールは「インターナショナル」の大合唱に包まれるのである。ここで生じる陶酔は群集が革命の主体として立ち上がる瞬間を印づけるが、それはまた包圍する軍隊の銃撃によって死が訪れる瞬間でもある<sup>11</sup>。この場面の群集の表現に特徴的なのは、群集が多数の匿名の声からなるひとつの声によって表象されることであり、そこでは個人を見分けることはもはや不可能である。個人は完全に群集に統合されている。加えて、この群集は悲壮であると同時に死に突き進む不合理的な衝動によっても突き動かされており、クリスティアンゼンの分類に従うなら、G様式を体現していると言えるだろう。

ヴァイマル共和国初期には、小説でも革命的群集が主題化された。たとえば、ヘルミニア・ツウア・ミュレンの1922年の長編小説『光』の一場面を取り上げてみよう。主人公の炭鉱労働者アンドレアスが解雇された後、同僚の労働者たちは居酒屋に集まり、やり場のない怒りを抱え、押し黙っている。すると、どこからともなくひとつの声が響く。ここでも匿名の声が、『群集-人間』の場合と同様に、群集形成の契機となる。

そのとき広間の片隅からひとつの言葉が放たれ、雷光を閃かせて着弾し、無力さと臆病さと悲しみを粉碎した。

その言葉はバリバリと音を立てて鋭く鳴り響きながら部屋に行き渡った。ストライキ！ もはや無防備な者たち、鈍い絶望にとらわれた者たちがそこに集まって座っているのではなかった。彼らの手は彼らの前で光り輝く武器を握り、それを離さなかった。

(略)

アンドレアス・メルツの驚きに満ちた眼は、再び奇跡を見たのだった。物の見方や性格や年齢の違いによって切り離されていた一人ひとりから、群集が生まれたのだ。解消することもバラバラにすることもできない一者、分割不能な奇妙な新しい元素(Element)が生まれたのである。<sup>12</sup>

ここでも革命的群集は、諸個人の差異と隔たりを一気に解消するラディカルな同質化によって成立するものとして描かれている。そして、その群集形成は、それまで搾取の客体だった労働者たちが主体化する契機として理解されている。ここには共和国初期の群集表象の

<sup>11</sup> Ernst Toller: Masse-Mensch. Ein Stück aus der sozialen Revolution des 20. Jahrhunderts. Potsdam (Gustav Kiepenheuer) 1928, S. 49-59.

<sup>12</sup> Hermynia Zur Mühlen: Licht. Konstanz (See-Verlag) 1922, S. 110. 強調引用者。

特徴をはっきり認めることができる<sup>13</sup>。

こうした革命的群集の表象に代わって、およそ 1924 年ごろを境として新しいタイプの群集表象が前景化し、主導的な役割を果たすようになる。先にこの新しい群集の表象を「技術的-機能的群集」として特徴づけたが、それはこの群集が大都市の技術的・機能的なシステムに媒介された存在として把握されるからである。当時の都市小説においてこうした群集の表象をもっとも鮮やかに提示してみせたのは、アルフレート・デーブリーンの『ベルリン・アレクサンダー広場』（1929 年）だった。たとえば、そこには次のような群集のイメージが見いだされる。

男たち、女たち、子供たちがいる。子供たちはたいてい女に手を引かれている。(略) 東へ向かう人々の顔は西、南そして北に向かう人々の顔とまったく違わない。彼らはおたがいの役割を交換する。そういうわけで、いま広場を横切ってアッシンガーに向かって歩いていく人々は、一時間後には空っぽになった〔閉店した〕ハーン・デパートのまえにいてもありうるのだし、同様にブルネン通りから来てヤノヴィツブリュッケに向かう人々は、反対方向から来る人々とまじり合う。(略) 彼らは、バスや市電のなかで席に座っている人々と同様に一様である (gleichmäßig)。乗り物の中の人々はみな異なる姿勢で腰かけている (略)。彼らの内部でなにが起こっているのか、誰にそれを突き止めることができるだろう。途方もなく巨大な一章だ。(略) 彼らのことは、ごく単純に、20 ペニヒ支払った私人 (Privatperson) として扱っておけばよいのだ。(略) そして彼らはいま、50 キロから 100 キロのあいだの重さのある身体を伴って、銘々の服を着て、鞆と荷物と鍵と帽子と入歯とヘルニア帯を携えて、アレクサンダー広場を横切っていく。(略) 彼らは異なる政治志向の新聞を読み、内耳によってバランスを保っている。(略) 彼らのなかには苦痛を感じている人もいれば感じていない人もいる、考えている人もいれば考えていない人もいる、幸せであったり幸せでなかったりする、幸せでも不幸せでもなかったりする。<sup>14</sup>

ここでは広場を行き交う多数の人々が、大都市の技術的・機能的システム（都市交通のシステム）との関係において、そのシステムの利用者としてのみ記述されている。ひとりとして名前によって他から区別される者はおらず、彼らの内面を表現するかも知れぬ表情も完全に消し去られている。彼らは交通の参加者という機能において一様であり、平準化され、匿

<sup>13</sup> 革命的群集のより詳細な分析は次を参照のこと。Takeshi Ebine: Ekstasis. Zum Massendiskurs in der Weimarer Republik. In: Neue Beiträge zur Germanistik (Band 3), Japanische Gesellschaft für Germanistik, 2004, S. 164-182.

<sup>14</sup> Alfred Döblin: Berlin Alexanderplatz. Die Geschichte vom Franz Biberkopf. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1965, S. 168-169. 強調は引用者による。

名的な群集を形成している。しかし、興味深いことに、たとえ群集化しているとしても、彼らのあいだの差異は消滅していない。共和国初期の革命的群集のように、諸個人のあいだの差異と隔たりをラディカルに同質化することで高次の集合的主体が形成されるわけではないのである。彼らはそれぞれ異なる方向に異なるスピードで移動し、それぞれ異なる服装を身にまとい、異なる身体的特徴を持ち、異なる新聞を読み、異なる苦痛と幸福感を感じている。たしかにそうした差異は存在するのだが、ここではそれがいかなる違いも生み出さない。技術的-機能的群集の特徴は、ラディカルな同質化ではなく、そうした差異の陳腐化にある<sup>15</sup>。技術的-機能的群集は、デモや蜂起によって都市の交通を遮断する革命的群集とは対照的に、交通の秩序を攪乱することはない。たとえそうした群集が雑然とした印象を与えることがあるとしても、その印象は異なる目的地に向かう多数の人間を統御する合理的・技術的秩序の効果であるにすぎない。

### 3. 〈交通〉というトポスと視点の問題

すでに指摘したように、いま参照したデーブリーンの小説の一節では、都市の公共空間の描写が交通のシステムの記述に取って代わられている。大都市で生活する人々の振舞いは、人々の動きを秩序づける機能的なシステムとの関係において把握されるのである。このような現実への眼差しは、デーブリーンのみ見られるものではなかった。ヘルムート・レーテーンがかつて指摘したように、新即物主義の隆盛期の文学的・思想的言説では、「交通」(Verkehr) が社会的現実の「知覚モデル」となったのだ<sup>16</sup>。すなわち、大都市生活、ひいては「社会的なもの」の領野の全体が、狭義の交通システム(交通機関)をそのモデルとするような、機能的かつ合理的なシステムとして知覚され、記述されることになったのである。レーテーンの示唆を受けて「交通」というトポスの歴史的展開を詳細にあとづけたヨハネス・ロスコテーンは、ヴァイマル共和国時代の中期には、全般的な加速とモビリティの上昇によって特徴づけられる日常生活様式の変容を考察するにあたって、「交通という技術的-社会的領野が新即物主義の主導的言説になった」と指摘している<sup>17</sup>。「文化理論家と文学者たちは近代の観察にあたって、大都市の流通=循環(Zirkulation)という観察の雛形を利用する。自動車、バス、市電の流れ、地下の人員輸送、エレベーターやエスカレーターによる垂直的な空間の踏破のうちに、近代という時代はその姿を現わすのである」<sup>18</sup>。当時の知識人や

<sup>15</sup> これはスローターダイクが、メディア化した群集の特徴として指摘した性質でもある。Vgl. Peter Sloterdijk: Die Verachtung der Massen. Versuch über Kulturkämpfe in der modernen Gesellschaft. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 2000, S. 17.

<sup>16</sup> Helmut Lethen: Verhaltenslehren der Kälte. Lebensversuche zwischen den Kriegen. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1994, S. 44.

<sup>17</sup> Johannes Roskoth: Verkehr. Zu einer poetischen Theorie der Moderne. München (Wilhelm Fink) 2003, S. 110.

<sup>18</sup> Ebd.



作家たちは、「交通」の領野のうちに、近代社会全体を特徴づける趨勢を読み取ったのだ。

後に確認するように、マルティン・ケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』でも、冒頭の場面で登場人物たちはまず、大都市を秩序づける交通のシステムの参加者として導入される。ケッセルの場合にも、社会的現実の知覚モデルとして「交通」が利用されており、会社員たちはその視点から分析されている。そして、交通のシステムは、それを特徴づける流通＝循環、合理化、機能化、平準化といった点で、Betrieb（企業体、機械の作動、活発な動きなどを意味する）と結びつく。Betrieb は Verkehr とならんで、会社員の分析で重要な役割を果たしたトポスだが、交通のシステムを記述するさいにも用いられた。たとえば、Betrieb/Betriebsamkeit という観点から新即物主義の文学を考察したゼバスティアン・マルクスは、ポツダム広場の忙しい交通が、観察者には「見通しがたい、無意味な騒がしさ (Betrieb)」と感じられたことを指摘している<sup>19</sup>。クラカウアーは会社員を大都市、企業体、文化産業の三点から観察したが、そこでは Verkehr と Betrieb の両方のトポスが重要な役割を果たしている。クラカウアーがその考察で試みたのも、近代という時代の趨勢の分析であった<sup>20</sup>。クラカウアーのような観察者にとって、会社員はティラーガールズや大都市の交差点と同様に、そこに当時の社会構造を読み取ることのできる特権的な事象だったのである。

ヴァイマル共和国中期の言説空間において「交通」というトポスが隆盛した背景として、レーテーンは、このトポスによって示唆される合理的・機能的システムが、戦争と革命とテロに揺さぶられたヴァイマル共和国初期の社会的・文化的危機に対する処方箋として機能した可能性を指摘している<sup>21</sup>。交通のシステムは、個人の信条や社会的地位を一切問うことなく、純粹に機能的な観点から多数の人間のあいだの結びつきを秩序づけるように思われたがゆえに、知識人にとって魅力的なモデルとなったというのである。たしかにこの仮説には一定の説得力があるが、それでも同時代の観察者が依拠した「交通」の理解を無批判にヴァイマル共和国時代の文学作品の分析に援用することには慎重でなければならぬだろう。というのも、その場合には、同時代の観察者の言説が属していた歴史的な脈が見落されるからである。したがって、ここでは「交通」というトポスを別の角度から捉え直してみたい。

そのさい最初に確認しておかねばならないのは、新即物主義の文学が展開したヴァイマル共和国の 1920 年代が、ダイナミックな都市化がほぼ完了した時期に当たっているという事実である<sup>22</sup>。ジンメルが 1903 年に分析してみせたような、大都市生活が人びとの精神生活に及ぼす衝撃は、1920 年代中葉のベルリンではすでに消化されていた。また未来派が各

<sup>19</sup> Sebastian Marx: Betriebsamkeit als Literatur. Prosa der Weimarer Republik zwischen Massenpresse und Buch. Bielefeld (Aisthesis) 2009, S. 52. 他方、クラカウアーは、交通の比喩を用いて、職業紹介所を「無数の線路のある操車場」と呼んだ。Kracauer: Die Angestellten, S. 263.

<sup>20</sup> Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 10.

<sup>21</sup> Lethen: Verhaltenslehren der Kälte, S. 44.

<sup>22</sup> Vgl. Lauffer: Poetik des Privattraums, S. 27.

種のマニフェストで賛美したような近代技術がもたらす速度とモビリティの経験も、そこではすでに日常的なものとなっていた。当時の言説において「交通」というトポスが台頭したという事実は、なによりもまず、そうした状況の変化を反映している。「20年代の進展のなかで、未来派的・表現主義的な運動の身ぶりは市民的な (zivil) 交通のトポスに転換した。同時代人の行動のポテンシャルは、もはや戦場において実現されるのではなく、日常的な循環＝流通 (Zirkulation) の市民的な領域で実現されたのである」<sup>23</sup>。ロスコテンが指摘する通り、この時期に「ドイツ社会のかなりの部分の生活感情は、はじめて前衛たちの様式的な衝動と調和した」のだった<sup>24</sup>。ヴァイマル共和国中期は、速度とモビリティの経験の日常化、通俗化、大衆化の印のもとにある。

したがって、新即物主義の都市小説においては、戦場でしか体験し得ないような速度とモビリティの限界体験が文学的インスピレーションになることはなかった。それらの小説の関心の中心を占めたのは、都市生活者の日常的な経験だった。こうした関心の変化に対応して、新即物主義の都市小説では、街頭だけでなく、登場人物たちの居住空間もまた重要な役割を果たすようになる。ただしこの居住空間は、すでに述べたように、19世紀の市民階級の室内、家族的な親密さと結びついた定住の空間とは異なっていた。それはむしろ大都市生活のモビリティに対応した独身者の暫定的な滞在地であった。ラウファーは、従来の新即物主義文学の研究では「あたかも1920年代の主人公たちがいまだに世紀転換期の遊歩者のような人物であるかのように、すなわち近代の首都によって過剰な要求に曝され、あるいはそれに魅了された人物であるかのように」考察されていると批判し、それらの文学作品に描かれた新しいタイプの居住空間とそこで登場人物たちが試みる流動的なアイデンティティの構築に注意を促している<sup>25</sup>。「表現主義者と未来派が首都の躍動するダイナミズムに魅了されていたのに対して、新即物主義の作家たちは、はるかに目立たない私的空間を彼らの関心の中心に据えた」のである<sup>26</sup>。彼らの小説の登場人物たちは、都市生活を統御する交通のシステムのうちに、強制力だけでなく、モビリティの向上がもたらす自由をも感じ取っていた。

一方、「交通」のトポスにもとづいて同時代の大都市を文化批判的に観察した知識人や批評家は、そうした小説の登場人物たちとは異なる視点から交通のシステムを観察した。そしてそのさい、彼らはみずからの観察を歴史哲学的な解釈と結びつけた。小説家の視点とそうした観察者の視点の違いは、交通に参加する者の視点とそれを外部から俯瞰する者の視点の違いである。小説家が物語を語るなかで交通に参加する登場人物の視点を導入するのにたいして、知識人や批評家は局外の観察者の座を占める。この違いが持つ意味を、ロスコテ

<sup>23</sup> Roskothen: Verkehr., S. 110.

<sup>24</sup> Ebd., S. 127.

<sup>25</sup> Lauffer: Poetik des Privatraums, S. 19.

<sup>26</sup> Ebd., S.20.

ーンは円形交差点を例にとって、次のように説明している。

交通の参加者の立場から観察すると、円形交差点はダイナミズム、決断、行動と反応を表している。俯瞰的視点に立つ観察者（略）から見ると、パノラマ的に異化された眼差しが生じる。その眼差しは円形交差点に何よりもまず、つねに同じであり続ける、決して静止することのない循環を見るのである。<sup>27</sup>

局外から俯瞰する観察者は、交通の参加者とは異なり、交通のシステムを目的を欠いた循環のシステムとして解釈する。そして、この意味を欠いた空虚な合目的性の形式は、しばしば資本主義に特有の自己目的化した道具的理性 (Ratio) の現れとして解釈された。たとえばクラカウアーは、こうした Ratio の作用を会社員が働く企業体 (Betrieb) だけでなく、彼らを楽しませる文化産業の産物にも見だし、そこに会社員の精神的故郷喪失 (geistige Obdachlosigkeit) を診断している (DA288)。こうした「ラディカルな」言説とは異なり、新即物主義の都市小説は、登場人物の視点を導入することで、局外者の視点から逸脱する契機を含み込むことになる。それゆえ、それらの小説を考察するさいには、局外の観察者による「交通」のトポスの解釈を作品の解読格子として利用するのではなく、そうした解釈との相互作用やそれからの偏差に注意を払うことが重要になる。

ヴァイマル共和国時代の会社員に関する言説を検討したビーブルは、クラカウアーに代表される文化批判的な会社員の考察が、新しい現実を代表する存在として会社員に注目しながらも、それを旧来のなじみのある現実構成の領域に引き戻して分析することしかしなかったと指摘している<sup>28</sup>。すなわち、会社員という新しい存在は、それが体现する可能性においてではなく、そこに見いだされる欠如 (人格の欠落、個性の喪失、主体性の欠如など) において考察されたのである。会社員小説を新たな角度から読み直すには、そうした言説が提示する会社員への眼差しを再検討する必要がある。同様のことは、交通のトポスの文化批判的解釈にも当てはまる。たとえ「交通」というトポスの重要性に間違いがないとしても、それを解釈する視点は複数存在しうるのである。ここでは会社員小説を読み直すための準備作業として、クラカウアーの『会社員』を群集の言説という観点から簡潔に考察してみたい。

#### 4. 群集の言説としての『会社員』(クラカウアー)

クラカウアーの著作『会社員』は、今日まで新即物主義の会社員小説の解釈に大きな影響を与えている。ここでは『会社員』でなされる議論の歴史的な脈を明らかにするために、そ

<sup>27</sup> Roskothen: Verkehr, S. 129 (Anm. 332).

<sup>28</sup> Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 12.

れが同時代の群集の言説とのあいだに持っている結びつきに注目してみたい。じっさい、この観点から読み直すとき、『会社員』には、同時代の群集をめぐる言説に特徴的な要素が多数見いだされるのである。ここでは6つの点に絞って簡潔に考察してみたい。

最初にまず基本的な確認であるが、クラカウアーは同書のなかで「会社員」(die Angestellten)という言葉をつぎつぎ Masse という言葉と一緒に用いている。Angestelltenmassen<sup>29</sup>や Masse(n) der Angestellten<sup>30</sup>という言い回しが用いられるだけでなく、Masse という単語で die Angestellten を指示する用例が見いだされる<sup>31</sup>。こうした用例からも見てとれるように、クラカウアーにとって会社員が群集 (Masse) であることは自明であった。

次に注目に値するのは、『会社員』が古典的群集心理学と同様の図式に従って考察対象を導入していることである。ル・ボンにとって、群集は西欧文明が生み出した内なる他者だった。それはすでに社会的現実は無視できぬ影響を及ぼしているながらも、いまだ知識人によって十分に解明されていない未知の存在だった<sup>32</sup>。この他者性ゆえに、ル・ボンの群集心理学では、群集はヨーロッパ人にとっての「未開人」に類似した存在として位置づけられた<sup>33</sup>。クラカウアーの議論では、会社員が直接に未開人に喩えられることはないものの、未開人と同様の他者性を帯びた存在として議論に導入される。『会社員』の冒頭でクラカウアーは次のように書いている。

数十万人の会社員が、日々、ベルリンの街頭に溢れている。しかし彼らの生活は、会社員たちが映画で見て感嘆する未開の部族の生活よりも知られていない。(DA218)

この個所では、群集としての会社員が明確に未開の部族と比較可能な存在として位置づけられている。クラカウアー自身と彼の本を読む知的な読者層にとって、どちらの存在も程度の差こそあれ、未知であり、他者であった。こうした意味関連の設定が偶然でないことは、同様の発言が別の個所でも繰り返されていることから明らかである。クラカウアーは、みずからの探求をアフリカへの調査旅行になぞらえ、「この小さな調査旅行はひょっとしたらアフリカ旅行の映画よりも冒険に富んでいるかも知れない」(DA221)と述べる。クラカウアーの会社員論は、ヴァイマル共和国時代に生み出された群集をめぐる言説の多くと同様に、群集心理学が設定した思考の枠組みの影響下にある。

『会社員』と同時代の群集の言説とのあいだの第三の接点として、いま引用した個所でクラカウアーが、ベルリンの会社員たちを映画の観客として提示している点に注目してみた

<sup>29</sup> Kracauer: Die Angestellten, S. 219, S. 221, S.246.

<sup>30</sup> Ebd., S. 243, S. 288.

<sup>31</sup> Ebd., S. 265, S. 291.

<sup>32</sup> Gustave Le Bon: Psychologie der Massen. Übersetzt von Rudolf Marx, Stuttgart (Kröner) 1982, S. 7.

<sup>33</sup> Ebd., S. 19.

い。大都市の街頭、会社員たちが働く企業体、そして彼らを主要なターゲットとする文化産業という三者が形作る布置のなかに会社員を位置づけるとき、クラカウアーの考察は、すでに述べた 1920 年代中期以降の技術的-機能的群集のパラダイムに従っている。というのも、大都市の交通 (Verkehr)、企業体 (Betrieb)、文化産業 (Kulturindustrie) に共通するのは、合理化と平準化の力学だからである。そこでは諸個人は合理化されたシステムのなかで果たす機能に還元され、平準化される。この合理化と平準化の作用のもとで、会社員はそれぞれの機能に合わせた規範的類型へと規格化されることになる。以下の一節では、そうした機能的・合理的システムによって媒介された群集として、会社員が定義されている。

会社員たちは、今日、群集 (Masse) として暮らしている。この群集の存在はとりわけベルリンやその他の大都市において、ますます単一の特色を帯びてきている。一様な職業的状况と団体協約がその存在の様式を条件づけているが、それに加えて、その存在は (略) 強力なイデオロギー的諸力による規格化の影響も蒙っている。これらすべての強制力が女性販売員、既製服製作者、女性速記タイピスト等々の規範的類型を産み出していることは明白である。そうした規範的類型は、雑誌や映画館で表象されると同時に培養される。それらの類型は一般の意識にまで入り込んでおり、その意識がそれら類型に従って新しい会社員の階層の全体像を形作っているのである。(DA265)

クラカウアーが指摘する規範的類型は、抽象化された統計的モデルではなく、社会的なプロセスの現実的所産であった。それは会社員たちの労働条件 (いつでも交換可能な機能的存在への還元) とメディア化された表象、およびそうした表象を利用する消費経済の複合的な作用の産物として記述できる。「規範的類型は、それに働きかける経済的・社会的諸力の交点に成立するが、それが類型として構築され同定可能なものとなるには、メディアによる映像化と再生産 (複製) を必要とする」<sup>34</sup>のである。クラカウアーは「品行方正な薄紅色の肌」(moralisch-rosa Hautfarbe) を追求する会社員たちにみられる外見や身ぶりの規格化の背後に、交換可能な存在でしかない者の不安を読み取っているが (DA230)、規範的類型こそ、クラカウアーにとって資本主義的な理性 (Ratio) の作用を証拠立てる事象であった。とはいえ、ここでクラカウアーの念頭にある会社員の規格化は、フリッツ・ラングの『メトロポリス』(1927 年) に描かれる労働者のような画一性——あらゆる差異の消滅——を意味してはない。ここで問題になっているのは差異の陳腐化であり、クラカウアーは、表層的な差異の戯れの背後で進行する規格化のメカニズムを指摘しているのである。

会社員たちを規範的類型へ規格化された存在とみなすクラカウアーは、彼らにたいして、自由に思考し行動する能力を持つ個人——主権的主体——のステータスを認めていない。

<sup>34</sup> Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 126.

この点でもクラカウアーの会社員論は、群集の言説の思考の枠組みに従っている。クラカウアーは、会社員たちに、みずからの置かれた状況を批判的に思考し、その状況を主体的に打破する能力があるとはみなしていない。序文においてすでに、クラカウアーは会社員を「自分自身について話すのが困難な」(DA214) 存在として特徴づけているが、本論の冒頭でも「彼ら〔会社員〕はみずからの置かれた状況についてまったく意識を欠いている」(DA218) と断言している。加えて、会社員の採用に利用される適性検査を論じた章では、そうした検査が掲げるお題目とは裏腹に、会社員たちの仕事が「人格」(Persönlichkeit) などまったく必要とせず、彼らを人格として扱ってもいけないことが指摘される (DA225)。人格の欠如もまた群集化した個人の特徴としてしばしば言及される論点である。さらに批判的思考の欠如については、若い会社員たちが市民階級の生活様式の影響を無批判に受け入れていることを指摘しながら、「多くの者は何も知らずに (unwissend) 流されて、本来自分がまったくそこに属していないことに気づかぬまま参加している」(DA268) と述べられている。

したがって、クラカウアーにとって、会社員の現実を認識するのは、会社員自身ではなく知識人の役目であり、彼らの状況を変えるのも——後に確認するように——会社員自身ではなく指導的階層の任務であった。ビーブルが指摘するとおり、この点でクラカウアーの探求は、マルクスの企てとは異なっている。

会社員たちはクラカウアーの社会分析の客体であり、彼らはクラカウアーが行う啓蒙作業の主体ではない。この点にマルクスの企てとの本質的な違いがある。(略) マルクスがプロレタリアートに向かって(略)、彼ら自身の状況とそれと結びついた歴史の主体としての役割を意識化させようとしたのにたいして、クラカウアーは明らかに会社員たちに「ついて」語っており、彼らに「向かって」語ってはいない。クラカウアーの分析の宛先は知的読者層なのである。<sup>35</sup>

じっさいクラカウアーにとって、会社員はどこまでも客体的な存在だった。これが『会社員』と群集の言説の5つ目の接点である。クラカウアーは、会社員たちがその「精神的故郷喪失」ゆえに、容易にイデオロギー的諸力による操作の客体になることを繰り返し指摘している。ヒット曲が女性会社員に及ぼす影響力を述べた個所では、「彼女がヒット曲を知っているのではなく、ヒット曲が彼女を知っているのであり、彼女を手中に収め、優しく打ち負かすのである。彼女は完全な麻痺状態に取り残される」(DA268) と述べられている。また従業員をあいだに共同体的な感情を醸成するために、企業がスポーツを活用していることを論じた個所では、そうした試みの意図が「群集精神 (Massenseele) を利用する」(DA274) ことにあると指摘される。あるいはまた、会社員に対して上流階級の顧客が及ぼす影響力を述

<sup>35</sup> Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 116.

べるクラカウアーの記述は、群集の言説でしばしば援用される「暗示」(Suggestion)や「伝染」(Ansteckung)の効果を連想させる(DA291)。さらに映画が会社員に及ぼす効果を記述するさいには、群集心理学が指導者による群集の操作を説明するさいの定番である「催眠術」の比喩が動員される。「映画産業によって提供される産物のほとんどすべて」は、「社会の見せかけの高みの持つ模造の輝きによって観衆(Menge)を麻痺させる」のであり、「催眠術師は光り輝く物体で被験者を眠り込ませるのである」(DA295)。

群集の言説においては、群集の客体性は指導者の必要性を正当化する機能を果たしている。クラカウアーの会社員論では、個人としての指導者の問題が論じられることはないが、指導(Führung)の必要性は論じられている。これが『会社員』と群集の言説を結ぶ最後の接点である。クラカウアーの考えでは、会社員の現状は、彼らを導くべき支配階層がその責任を果たせなかったことの結果である。会社員たちは、本来彼らが求めていた指導を得ることができなかつたがために、混乱に陥つたのだとクラカウアーは指摘する。

なぜなら、従属的な者たちの生活は、そこに課されている強制への十分な根拠づけを要求するのであり、支配層が正しい概念を欠いていればいるほど、彼らの生活はますます逆さまなものにならねばならないのだ。上層の沈黙が下層の混乱を引き起こすのである。(DA298)

クラカウアーはヴァイマル共和国の新しい支配層(企業家たち)に対して同情的である。彼らは指導者層としてその役割を果たす準備がまだできていないときに、任務を引き受けることになったのだ。戦後の時代の経過のなかで、彼ら〔企業家たち〕は変化した社会的・経済的状况と折り合いをつけねばならなかったが、消滅したかつての上流階級が残した空白を埋めるという要求も課されたのだ。ただ事業を経営するのではなく指導するという任務が、一夜のうちに生じたのだ(DA303)。この新しい支配層は「みずからの権力の利害に従うと同時にそれに抗してみずからの立場を世界観をもって基礎づける」(DA304)ことができなかつた。その結果、「会社員の日常がますます犠牲となった」のである(Ebd.)。クラカウアーは『会社員』の最後の章で会社員の組合が取り組む文化運動を論じているが、そこでは組合が依拠する文化の概念が批判されており、会社員の自己組織化の可能性に期待が表明されてはいない。クラカウアーの議論では、会社員は犠牲者であり、客体のままなのである。

以上、6つの観点からクラカウアーの『会社員』における議論と群集をめぐる言説との接点を確認してきた。この考察から明らかとなっており、クラカウアーの会社員論は同時代の群集の言説の文脈のうちに位置づけられる。新即物主義の都市小説を『会社員』の提示した観点から読むことは、それを当時支配的だった群集をめぐる文化批判的言説の枠内で考察する

ことにほかならない<sup>36</sup>。

##### 5. マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』に描かれる同期する身体

最後に以上の考察をふまえて、新即物主義の都市小説であり、また代表的な会社員小説のひとつでもあるマルティン・ケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』に描かれた群集と集団性の表象を簡潔に分析してみたい。そのさい、ここでは新たな角度から新即物主義の都市小説に現れる群集表象——あるいはその一員である会社員の人物造形——を検討するための観点として「同期」の概念を導入する。

『ブレッヒャー氏の失敗』は1932年に出版されたが、1929年の経済危機後に台頭した会社員小説というジャンルに属する作品である<sup>37</sup>。ケッセルはこの長編小説の執筆に1923年から取り組んでおり、当初予定されていたタイトルは『女性事務員たち』(Kontoristinnen)だった<sup>38</sup>。じっさい、この作品では、ブレッヒャーという男性会社員だけを主人公として物語が展開するのではなく、複数の女性会社員たちの物語もまた語られる。本作を詳細に分析したビーブルによれば、『ブレッヒャー氏の失敗』は、ヴァイマル共和国時代の会社員をめぐる言説を総括する作品である。そこではこの言説を特徴づける基本図式——社会分析の題材としての会社員、近代の生の条件を体現する存在としての会社員、無力な存在としての会社員の周縁化、社会を全体主義的に組織する原理としての企業体——が取り上げられ、結び合わされているという<sup>39</sup>。ただし、この小説に描かれる会社員を一方的に周縁化された無力な存在とみる解釈に対しては、異なる読解があり得ることはすでに述べた通りである。

本書は各部10章からなる3部構成の大作で、初版本では720頁のボリュームがある。物語の舞台は、はっきり時期は特定されていないものの1930年頃のベルリンで、主要な登場人物は全員、商品売買・出版・広告などを手がける大企業 Die Universale-Vermittlungs-Aktien-Gesellschaft (略称 Uvag) の宣伝部で働く社員たちである。すでに述べたように、この小説では複数の登場人物のエピソードを織り交ぜて物語が進行するが、中心的な位置を占めるのは男性社員マックス・ブレッヒャーと彼の大学時代からの同僚であるドクター・ガイスト、さらにブレッヒャーの発言につねに異を唱える女性社員グドゥラ・エフテン、および新入りの女性社員ムキ・シェップスの4人である。物語を大雑把に要約すると、第一部では Uvag のオフィスで社員たちが交わす会話を通して職場の人間関係が描かれ、第二部では主要な登場人物の家族が登場して労働と私生活の錯綜が語られる。そして第三部では Uvag でスト

<sup>36</sup> 次の議論も参照のこと。Sabina Becker: Experiment Weimar. Eine Kulturgeschichte Deutschland 1918-1933. Darmstadt (wbg Academic), 2018. S.78-94.

<sup>37</sup> Vgl. Becker: Neue Sachlichkeit im Roman, S. 17.

<sup>38</sup> Vgl. Lauffer: Poetik des Privatraums, S. 266.

<sup>39</sup> Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 243.



ライキの動きが発生し、ある事件がきっかけでブレッヒャーが解雇されることで、彼の運命とオフィスの人間関係が激変していく様子が描かれていく。本論では、第1部第1章と第3部第8章で描かれる場面を取り上げて考察する。

本書の冒頭に描かれる場面は、この小説がヴァイマル共和国中期以降に成立した多くの都市小説と同様に、大都市を交通の機能的システムとして把握し、そこに参画する人びとを技術的-機能的群集として描くことを明瞭に示している。小説はベルリン・フリードリヒシュタット地区の街頭の次のような描写から始まる。

毎日、特にオフィスが閉まるころには、中心部、すなわちベルリンの基礎に震動が走る。まるでなにか想定外のことが起こってでもいるかのように。あらゆるものが移動している。朝早く定刻に自分の会社の建物に到着した人びとは、いま再び——人間を単なる労働力に格下げし、その最良の部分を利用した消化のプロセスの後で——街頭に放たれ、私的な運命に委ねられる。ひとつの組織が解放すると、別の組織が受け入れる。労働力から乗客や歩行者が生まれ、彼らに対して映画館やレストランが門戸を開く。そしてそれぞれの段階がその対価を要求する。

ある場所で棒が空に向かって突き立てられ——停留所とも呼ばれる——たり、別の場所で地面の穴が地下鉄に通じていたり、演壇——プラットフォームとも呼ばれる——ができていたりすると、ただちにそこで結晶化が起こる。人びとが集まる。急ぎ足の様々に異なる種類の通行人たち、しかし彼らはまるで旗の回りに集まった最後の団体構成員でもあるかのように真剣な顔つきをしている。<sup>40</sup>

ここではベルリンの中心部の情景が交通のシステムという観点から把握されている。夕刻、会社から退社する人びとの姿が描かれているが、興味深いのは、それがひとつの機能連関から別の機能連関への移行として記述されていることである。昼間、労働力の機能を果たしていた人々は、通行人や乗客という機能的存在へ移行し、さらに映画館やレストランで消費者という機能を担うことになる。企業体、交通、文化産業は、都市空間のなかで互いに接続されたシステムであり、それらの総体が都市生活を支えるより大きな機能連関——交通のシステム——を構成しているのである。ここには新即物主義の都市小説を特徴づける交通というトポスが典型的な形で現れていると言ってよい。

群集もまたこうした交通のシステムに媒介された存在として描かれている。街頭に行く人びとは交通の結節点（停留所、地下鉄の入り口、駅のホーム）で結晶化する。それはシステムのなかで拡散している人びとがはっきりと群集として可視化される局面である。そのさ

<sup>40</sup> Martin Kessel: Herrn Brechers Fiasko. Stuttgart Berlin (Deutsche Verlags-Anstalt) 1932, S. 11. 以下ではタイトルを BF と略記し頁数を本文中に記載する。

語り手は、これら群集を構成する人びとを、差異の消滅した塊としては描いていない。「さまざまに異なる種類の通行人」に言及することで、差異の存在を指摘しているからである。しかし、それらの差異は機能的存在としての彼ら一人ひとりに何らの違いも生み出さない。差異が陳腐化しているのである。ここに描かれた群集は、私たちが技術的-機能的群集と呼んだものにほかならない。

こうしたベルリンの都市空間の描写に続いて小説の登場人物が導入されるが、彼らもまた冒頭に描かれた群集を構成する会社員たちのひとりとして提示される。会社の入り口に立つ二人の人物——ブレッヒャーと同僚のドクター・ガイスト——について、語り手は次のように述べる。

紳士風の強盗のように他人に思われたなら、それがもっとも彼らの意にかなっていただろう。しかし彼らはただの二人の平凡な会社員——宣伝部社員——にすぎないので、彼らはそれで満足する。(BF16)

彼らはフリードリヒ通りを歩き始める。このとき語り手は、さきほど語ったのと同じ機能連関の移行——労働力から歩行者への変容——が彼らのもとでも生じたことを読者に伝える。「街頭に出るや、ほとんど気づかれることのない劇が繰り返された。二人のごく平均的な給料を得ている会社員が、街歩きする男性に変身したのである」(BF17)。二人は会話しながら通りを下り、ライプツィヒ通りの角を曲がって、ポツダム広場へ向かう。特に明確な目的地があるわけではない、毎週土曜日の勤務後に繰り返される歩行を、語り手は次のように描写する。

彼らはライプツィヒ通りに沿って、恋人同士のように腕を組んで歩いていたが、乗客で一杯の電車とバスが傍らを轟音を立てて走り去り、車列をなしていた。それを後方から眺めると、独特の活気をもたらず楽しみが感じられた。(BF24)

彼らの歩みは都市の交通の流れの中にあり、彼らもその一部であるのだが、不意にその流れを観察して、そこに展開する運動のダイナミズムを楽しむこともある。しかしそんな時も、二人の会社員=通行人の眼差しは、クラカウアーのような批判的知識人が交通に向ける俯瞰的眼差しとは異なっている。二人は最終的にポツダム広場にたどり着き、結局はいつもの通り、カフェに落ち着くことになる。するとカフェの窓越しに、ビルの屋上で瞬く Uvag のネオンサインが見えるのだった。

こうした新即物主義の都市小説の登場人物たちを分析するさい、しばしば社会的類型という観点が強調されることはすでに指摘した通りである。それと並んでもうひとつの影響力

のある分析アプローチは、アメリカの社会学者デイヴィッド・リースマンが『孤独な群集』（1950年）で提案した社会的性格の一類型——「レーダー型」（他人指向型）——を新即物主義文学の登場人物の解釈に援用することである。これはヘルムート・レーテーンが1994年の著作『クールネスの行動学』（*Verhaltenslehre der Kälte*）で試みて以来、多くの後続の研究で採用されているアプローチである<sup>41</sup>。レーダー型の人物とは、自己のうちに内面化された価値規範に従うのではなく、つねに他人や周囲の環境（マスメディアも含む）から発せられるシグナルに注意を払い、それに合わせてみずからの行動を調整していく人物を指す。レーテーンがレーダー型という社会的性格を新即物主義文学の研究に導入したのは、そこに描かれる大都市生活のモビリティに順応した登場人物たちを「慣れ親しんだ歴史哲学的枠組みと文化批判的ルサンチマンから切り離して」<sup>42</sup>読み直すためだった。この類型によって、レーテーンは「新即物主義の時代に構想され、自律（Autonomie）の可能性を与えられた人物」<sup>43</sup>に光を当てようとした。その限りにおいて、レーテーンの考察は、新即物主義小説の登場人物のうちに単なる客体的存在ではなく、主体化の可能性を具えた存在を見いだす試みであったとすることができる<sup>44</sup>。しかしながら、実際の作品分析において、レーダー型の概念を用いて登場人物に具わる自律の可能性を考察することには困難が伴う。というのも、この概念には行動主義的な図式（刺激反応図式）との親縁性が拭いがたく付随しているからである。そこで本論では、このレーダー型に代わる観点として「同期」の概念を導入して、新即物主義の小説に描かれた登場人物たちの行動を考察してみたい。

本論が参照する「同期」（*Synchronisierung*）の概念は、元来、群れの振舞いの研究に由来する。それらの研究において、同期とは、多数の個体間のローカルな関係において生じる振舞いの変化が、外的環境からの刺激に対応する群れ全体の振舞いの変化を生み出すメカニズムを指す。その意味で、同期とは単なる同時性ではなく、同時性を生み出すプロセスである。個々の個体間で生じる動きの変化は非同期的だが、それらの動きが特定の仕方で連鎖することで、中枢的な統御も階層的な意思決定もなしに、群れ全体としては同期的な振舞い（たとえば方向を急に変えるなど）が生み出される。ゼバスティアン・フェールケンは、同期のプロセスを以下のように説明している。

相互の連関を欠いた単に多数の個体からなるバラバラで無秩序な群がり（Schwärmen）から、ひとつの群れ（Schwarm）が生じるには（略）、群れの全体的な動きがそこから発

<sup>41</sup> Vgl. Lethen: *Verhaltenslehre der Kälte*, S. 235-243. Loskothen: *Verkehr*, S. 133-135. Michael Gamper: *Masse lesen, Masse schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1756-1930*. München (Wilhelm Fink Verlag) 2007, S. 492-505.

<sup>42</sup> Lethen: *Verhaltenslehre der Kälte*, S. 235.

<sup>43</sup> Ebd.

<sup>44</sup> Lauffer: *Poetik des Privatraums*, S. 37-38

生するような仕方で、諸個体の個別的な動きを同期させる諸関係が効果を発揮しなければならない。それゆえ、群れとは決して完結することのない同期のプロジェクトだとみなすことができる。そこでは、中枢的な刻時装置やマスター・クロックを参照することなく、多数の非同期的な個別的運動が同期的運動へと結合される。<sup>45</sup>

パフォーマンス研究者のカイ・ファン・アイケルスは、2013年の著書『集団的なものの技芸』(*Die Kunst des Kollektiven*)において、こうした同期の概念を批判的に受容しつつ、人間が集団で行う行動にふさわしい同期の概念を探求している。本論が『ブレッチャー氏の失敗』の考察で援用してみたいのは、この同期の概念である。

ファン・アイケルスは、群れの科学がもたらした知見を二つの点で評価する。ひとつはそれが集団の自己組織化の能力を明らかにしたことであり、もうひとつはエネルギー論的な群集論から情報論的な群れの理論へのパラダイムチェンジを成し遂げたことである<sup>46</sup>。しかしその一方で、ファン・アイケルスはまた、群れの科学の知見を無批判に社会理論に転用することには批判的である。というのも、動物の群れの振舞いを主な研究対象とする群れの科学の知見を安易に社会理論に援用すると、集団の行動とその組織化における権力や自由の問いが周縁化されてしまい、結果として、容易にポストフォーディズムのイデオロギーと結びついてしまうからである<sup>47</sup>。こうした問題意識にもとづいて、ファン・アイケルスは人間の集団的な行動と組織化の分析にふさわしく「同期」の概念をアップデートした。

ファン・アイケルスは、17世紀の数学者・物理学者・天文学者クリスティアン・ホイヘンスの同期現象の発見にまで遡ってこの概念の成立を確認しているが、ファン・アイケルスによれば、同期とは、それぞれ異なるリズムを持つ複数の行為やプロセスが相互に影響を及ぼし合うことで、おおよそのリズムの連関が成立する事象である。集団のパフォーマンスや行動における同期を、ファン・アイケルスは次のように定義する。

同期とは、それぞれに異なる固有のリズムを持ついくつものパフォーマンスやプロセスが相互に影響を及ぼし合うことで、ひとつのおおよそのリズム的連関が生み出される過程である。(略) そのさい決定的な特徴は相互性である。(略) また同期による同調は一体化 (*Vereinheitlichung*) をもたらさない。たとえわずかであろうとも (略)、つねに複数のリズムのあいだには差異が残り続けるのである。そして、同期は融合 (*Verschmelzung*) を引き起こさないので、相互の連関はつねに反転可能である。同期は

<sup>45</sup> Sebastian Vehlken: *Zootechnologien. Eine Mediengeschichte der Schwarmforschung*. Zürich (diaphanes) 2012, S. 265-266.

<sup>46</sup> Vgl. Kai van Eikels: *Die Kunst des Kollektiven. Performance zwischen Theater, Politik und Sozio-Ökonomie*. München (Wilhelm Fink) 2013, S. 166-167.

<sup>47</sup> Vgl. ebd., S. 31-33, S. 204-207, S. 287-288.

諸々の行動や出来事のあいだで情報を伝達するメディアムを必要とする。そこでは、アナログであれ、デジタルであれ、複雑性の低いものであれ、高いものであれ、〔情報を〕伝達するものはすべてメディアムとみなされる。重要なのは、伝達 (Übertragung) が現実<sup>48</sup>に生起するということである。「伝達」は単に想像上のプロセスを隠喩的に表しているのではない。<sup>48</sup>

このように定義された同期には、以下の6つの特徴がある。(1) 同期においては、エネルギー論的なパラダイムにおける群集形成——ひとつのエネルギー源 (たとえば指導者) から発せられたエネルギーが人びとのあいだを循環することで群集を形成し、それを突き動かす——とは異なり、何かを共有する必要はない。(2) 同期は相互性に立脚している。すなわち、同期する諸個体は、それぞれが動く能力 (agency) をみずからのうちに保持している。この点で同期は、一方向的なエネルギーの伝播としての共振 (Resonanz) から区別される<sup>49</sup>。(3) 同期においては、ひとつの全体への諸個体の統合は起こらず、個体間のリズムの差異が存続し続ける。(4) 同期を律するのはエネルギーではなく情報である。ある個体の動きとリズムの変化が差異の知らせ (情報) となり、他の個体の動きとリズムに影響を与える。(5) したがって、同期は情報を伝達するメディアムを必要とする。(6) 情報の伝達は現実の出来事である (パフォーマンス論でコ・プレゼンスを定義するエネルギーの共有においては、エネルギーは隠喩に過ぎない)<sup>50</sup>。

この同期の概念が興味深いのは、それが人々の集団的な行動を、自由な主権的主体によって遂行される行為としても、また何らかの強制力の作用によって生み出される現象としても、扱わないことである。たとえば、私たちが混雑した歩道を歩くときに起こることを、この同期の概念によって考察してみよう。この場合、私たち一人ひとりの歩行は、歩道と車道の分割や信号や各種の表示によって規制されるだけではない。他の人々の歩みと同調する限りにおいてのみ、私たちは進みたい方向に進むことができる。しかし、だからといって、私たちはみずからの身体を統御する力を完全に失ってはいないし、みずからの歩行のリズムや方向を変える自由を失ってもいない。すなわち、路上を同期しながら移動する私たちは、誰もが集団性と個性のあいだを揺れ動き、動きつつ動かされているのである。本論の最後に『ブレッチャー氏の失敗』の一場面をこのような同期の観点から考察することで、会社員を主人公とする新即物主義の小説の特徴のひとつとして、集団性と個性のあいだで揺れ動く人物たちの姿を考察してみたい。

ここで取り上げるのは、小説の第3部第8章にある一場面である。Uvag 社から解雇され

<sup>48</sup> Ebd., S. 166.

<sup>49</sup> 共振と群集の結びつきについては本叢書収録の桑田論文を参照のこと。

<sup>50</sup> Vgl. ebd., S. 164-177.

て失業者となったブレッヒャーは、同僚たちの前から姿を消し、零落した姿でベルリンの街を徘徊していたが、ある夜、ベルリンの街頭で元同僚のグドゥラ・エフテンに遭遇する。

この小説のなかでブレッヒャーは、他の会社員たちの体制順応的な態度から一線を画し、資本主義的な価値観を内面化した同僚たちの言動を絶えず皮肉っていたのだが<sup>51</sup>、解雇によって資本主義のシステムから追放されることになる。しかしながら、それは個人を機能的存在として平準化するシステムからの解放を意味してはいなかった。失業もまた——小説の冒頭の場面で示されていたのと同様に——ひとつの機能連関から別の機能連関への移行にすぎないからである。そのとき人は企業体のなかの機能的存在から社会福祉制度のなかの機能的存在になるのであり、数的な存在として管理されることに変りはなかった (BF651)。それゆえブレッヒャーは新しい職を探すのではなく、夜、ナイフを手にしてベルリンの街頭を彷徨い、行き過ぎる女性のあとをつけるようになる。

ある日の夜9時頃、エフテンはクアフルステンダムをタウエンツィーン通りに向かって遊歩 (flanieren) していた。同僚のムキの母親のもとを訪ねた帰り道に華やかなベルリンの大通りの雰囲気を楽しむためである。ちなみにエフテンは片足に障害があり、跛を引いて歩く女性である。語り手はエフテンが味わう感情を次のように描写する。

じっさいのところ、彼女はここでこの夕べを楽しむ唯一の人間だった。それを彼女は疑わなかった。光り輝く塵が作る雰囲気、社交的で淀みなく流れる交通 (Verkehr) の魅惑を彼女は味わっていた。周囲になにか感染力のあるものを感じ、ひとつひとつの行き過ぎる顔に明るく照らされるものを感じた。そして彼女はカップルや洒落た男たちに、またそこで妻たちが浮気をはじめるカフェの一角に、密かに挨拶を送ったのだった。(BF643)

ここでは夜のベルリンの街頭の魅力が交通の魅惑として提示されている。「社交的で淀みなく流れる」(gesellig und reibungslos) という形容詞が示唆しているように、ここで「交通」と呼ばれているのは、単に道路を行き交う車や市電だけではない。路上を行き交う女性や男性もまた交通の一部であり、カフェの男女の (エロティックな) 関係もそこには含まれる。それらすべてが光り輝く街頭の雰囲気を作り上げ、エフテンを魅了しているのである。

エフテンはタウエンツィーン通りに入り、マネキンが並ぶショーウィンドウの前で立ち止まる。最新の流行を観察するためである。この個所でも、エフテンが背を向けているカイザー・ヴィルヘルム記念教会の周囲をめぐる交通の流れが記述され、星空の光が街頭の明かりと混ざり合う。「彼女の背後で記念教会の周囲を回る交通が行き交っていた。多種多様でいくつも層をなす照明の効果にとって恰好のプラネタリウムである大空は、ここではより広々と広がっていた。そして街路もまた星形に広がって走っていた」(BF644-645)。

<sup>51</sup> Vgl. Spies: Die Angestellten, die Großstadt und einige „Interna des Bewußtseins“, S. 244ff.

交通の場にたたずみ、ショーウィンドウに展示されたスカーフを眺めるエフテンに、背後から何者かが近づく気配がする。彼女が周囲に注意を払いながらその人物を見ると、それはブレッヒャーだった。ブレッヒャーは手に持っていた剃刀を地面に落とす。

エフテンという女性は、この小説において、職場の同僚たちに単なる機能以上の存在——ひとりの人間——を見ようと努力する人物として描かれている。彼女は女性社員たちの相談に乗り、彼女たちが自分の生活を変えようとするのを手助けする人物であり、ブレッヒャーの皮肉な発言に絶えず反撥していたのも彼女だった<sup>52</sup>。零落したブレッヒャーの姿を目の当たりにしたエフテンは、「ブレッヒャーを再び人間に戻すために」(BF654) 自分の部屋に連れて行くこうと決心する。エフテンはブレッヒャーの腕を取り、彼の身体を自分の身体の方に引き寄せて歩き出す。二人はニュルンベルク通りを進んで行く。エフテンはフリーデナウの自宅まで市電を使うつもりだったが、ブレッヒャーの歩みが止まらないのでそのまま歩き続けることにする。語り手は彼らの歩みが都市の交通のシステムの内部で起こっていることを読者に示唆する。

平行して線路が走っていた。家々の化粧しつくいほはグロテスクに若返った。家の番号が続いた。そして人びとは互いのことを知らなかった。彼らは互いに無関心だった。  
(BF655)

この記述に続いて、通りを進むエフテンとブレッヒャーの姿が描写される。そこには非常に奇妙な集合的運動が見いだされる。二人は、都市を行き交う技術的-機能的群集とは微妙に異なる集団性を作り出しているのである。

この二人の人物を目で追う者がいたならば、彼らの歩行の強情さ (Eigensinn) の観察にふけたことだろう。どちらも普通に歩いてはいなかった。男の側がふらつき、軽くよろめかねばならない一方で、女の側は跛を引きながら上下していた。統一体とみなすなら、彼ら二人は、ある作動中の機械の人間的な象徴になりえただろう。その機械の複数の運動はラディカルな差異にもかかわらず、互いにかみ合っていた。一方にとってあちらとこちらへの揺れであったものは、他方にとっては上下の動きであった。彼らがこの奇妙さをみずから理解するのは、耐久力の問題、相互的な接近のプロセスの問題にすぎなかった。(BF655-656、強調は引用者による)

前述の同期をめぐる議論をこの場面の考察に援用するなら、異なるリズムで運動する二人の人物の身体が、相互に影響を及ぼしあうことで「同期」した動きを生み出していると言う

<sup>52</sup> Vgl. Lauffer: Poetik des Privatraums, S. 258-266.

ことができる。そのさい、この同期は二人のあいだの差異を解消することはない。二人は、たとえば革命的群集のように、差異を失ってひとつの集合身体を形成するのではない。二つの身体は、差異を保ったままひとつの共同性を作り出すのである。

またこの二人の運動は、周囲の環境から隔絶してはおらず、それと干渉することもない。彼らの周囲では市電や自動車が走り、建物が連なり、通行人たちが行き交っている。「周囲の生活は通常の歩みを続けていた。映画館は通行人たちを勧誘し、タクシーは素早く、また売春婦のように、通りすぎた」(BF657)。彼らは交通のシステムのなかで、周囲の環境とそこに生起する運動によって動かされながら動いている。彼らは都市の技術的なインフラストラクチャー(歩道、車道、レール、建築物など)や市電や車や通行人の動きによって動かされているが、しかし彼ら自身の力能を完全に失ってはならず、独自の組織化を成し遂げている。それによって、彼らは交通のシステムから完全に逸脱することなく自由を見だし、単なる交通のシステムの利用者とは異なる存在になることに成功する。じっさいブレッヒャーはエフテンの隣で動きながら、次のように感じるようになる。

しかし、交通信号のための一機能以上の存在である人間、運賃を支払った乗客以上の存在である人間の隣で歩くのは、良い気分だった。(BF657)

ブレッヒャーが機能に還元されない存在の隣でともに運動していると感じたとき、彼自身もまた機能への還元を逃れていたことは確かである。つまり、この場面で二人の登場人物は、同期によって、小説冒頭で描かれた機能的存在としての群集とは異なるオルタナティブな共同性を作り出しているのである。

この後、二人はエフテンの部屋にたどり着き、そこで風変わりな一夜を過ごすことになる。夜が明けると、労働者のゼネストの計画に関わりを持っているらしいブレッヒャーが地下に潜って姿を消す一方で、ブレッヒャーが抱いていたであろうゼネストによる蜂起の夢がエフテンによって夢見られることになる。このようにして小説は、資本主義のシステムに管理される群集とは異質な集団の胎動を暗示して終わりを迎える。それは1920年代初頭にヘルミニア・ツウア・ミューレンやエルンスト・トラウが描いていた革命的群集とも、1932年にユンガーが提示した「労働者」のヴィジョンとも異なる集団性の表象である。この小説の結末部の検討は改めて行わねばならないが、同期の概念は、本論で検討したケッセルの作品に見られるような、新即物主義の都市小説に特徴的な登場人物の動きと彼らが形作る集団性の表象を新たな視点から分析するのに有益な示唆を与えてくれる。

\* 本稿は JSPS 科研費 JP21K00439 の研究成果の一部である。



日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 1 5 7

# 「群集」を再訪する—ただしパトスなしに

—両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討—

海老根 剛 編

一般社団法人日本独文学会

*Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 157*

**Neubegegnung mit der Masse in der deutschsprachigen  
Literatur der Zwischenkriegszeit**

Herausgegeben  
von  
Takeshi EBINE

JGG Tokyo

本叢書は、春季・秋季研究発表会におけるシンポジウムの記録のため、日本独文学会が（2017年以降は学会ホームページにおいて）発表の場を提供しているものです。叢書の編集は、学会編集委員等による査読制をとらず、各編集責任者に完全に任されています。

Mit der Studienreihe (SrJGG) bietet die Japanische Gesellschaft für Germanistik den einzelnen Veranstaltern der Symposien in den Frühlings- und Herbsttagungen die Möglichkeit, die Beiträge und die Diskussionsinhalte der Symposien zu dokumentieren und (seit 2017 im Internet) zu publizieren. Die Artikel sind nicht von der JGG-Redaktion peer reviewed, sondern werden ausschließlich vom jeweiligen Herausgeber wissenschaftlich-redaktionell zusammengestellt.

## 目 次

はじめに

いま「群集」を再訪するということ

海老根 剛 ..... 1

発酵する群集

A・デーブリン『山海巨人たち』におけるモノの多様性

糸田 文 ..... 8

第一次世界大戦と「死者たちの群集」表象

——戦友意識と戦死者祭祀

古矢 晋一 ..... 27

ヘルマン・ブロッホにおける「群集」という未解決の問い

早川 文人 ..... 46

同期の詩学

マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』における群集と集団性の表象

海老根 剛 ..... 66

あとがき

古矢 晋一 ..... 89

## Inhalt

### Vorwort

Was heißt es heute, der „Masse“ neu zu begegnen?

*Takeshi EBINE* ..... 1

### Gärende Massen

Die Diversität der Dinge in Alfred Döblins *Berge Meere und Giganten*

*Aya KUMEDA* ..... 8

Die Vorstellung der „Massen der Toten“ im Ersten Weltkrieg

– Kameradschaft und Gefallenenkult

*Shinichi FURUYA* ..... 27

Die ungelöste Frage der „Masse“ bei Hermann Broch

*Fumito HAYAKAWA* ..... 46

### Poetik der Synchronisierung

Bilder von Masse und Kollektivität in Martin Kessels *Herrn Brechers Fiasko*

*Takeshi EBINE* ..... 66

### Nachwort

*Shinichi FURUYA* ..... 89

日本独文学会研究叢書 157号  
2024年10月19日発行  
© 2024 一般社団法人日本独文学会

*Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik*

Nr. 157

Alle Rechte vorbehalten

©2024 Japanische Gesellschaft für Germanistik e.V. Tokyo

「群集」を再訪する—ただしパトスなしに—  
—両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討—

編集 海老根 剛

発行 一般社団法人日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールフォーム <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

SrJGG

ISBN 978-4-908452-47-5